

ちゅうじょうせつり 柱状節理



▲ 笠倉山の立安沢で見られる
流紋岩の柱状節理(塩沢)



▲ 伊南川発電所の取水ダム近くの中島に玄武岩の柱状節理が
見られる(大倉)

節理とは、岩体に見られる規則正しく入った割れ目の中で両側にズレの見られないものをいいます(ズレを伴うものは断層に区別されます)。こうした節理は、主に火成岩に見られ、高温のマグマが冷却され、収縮することで形成されます。節理は、マグマよりも温度の低い空気や地面などとの接面(冷却面)に対して垂直にでき、その後、岩体内部に節理に沿って空気が入り込み水平方向に二次的な節理が生じるため、このような形状になります。節理はその形状によりさらに区分されており、柱状に割れ目が入るものを柱状節理と呼びます。その他にも板状節理や放射状節理など色々な節理があります。節理は、かつての大地の動きを知る一つの手掛かりであり、その見た目の美しさから各地の天然記念物や景勝地であることが多いです。

只見町では、流紋岩や玄武岩などの火山岩の柱状節理があります。塩沢川流域の笠倉山の立安沢には垂直方向に伸びる流紋岩の柱状節理を見ることができます。これは、新第三紀中新世中期の海底火山活動により流れ出した溶岩が冷却、形成されたものです。また、布沢川が伊南川に合流する地点にある中島、塩沢の只子沢橋付近の只見川左岸部には岩盤に貫入(マグマが地層や岩石内に入り込むこと)した玄武岩や流紋岩の岩体に柱状節理が見られます。こちらは水平方向に節理が形成されており、これは貫入した岩体が両側の岩盤に冷却されるためと考えられます。

身近な自然を学ぶ『ただみ観察の森』観察会 「杉沢のユビソヤナギ林 — 保全の必要性について考える —」

10月5日、国内の限られた河川にしか分布しない希少なユビソヤナギ(絶滅危惧種)が生育する杉沢の『ただみ観察の森』で自然観察会が開催され、10人が参加しました。只見町の伊南川沿いには、ユビソヤナギが広く生育し、国内最大級の自生地となっています。

参加者は、砂や礫に覆われた広い河原が生育に必要であることを学ぶとともに、洪水被害を防ぐための河川管理と保全を両立させるための課題などについて話し合いました。



▲ ユビソヤナギを観察し、保全の必要性などを話し合う参加者

※この広報紙は再生紙を使用しています



※環境にやさしい大豆油インキを使用しています